

目前に見るが如くに知ることを得べし。『我等の神エホバの我等に命じ給ひし如くに、我等はホレブより出で立ち、汝等が見知れる彼の大きな畏ろしき曠野を通り、アモリ人の山を指してカデシバルネアに至れり』(申一・一九)と。全エト・チー即ち『流離の曠野』の中最も興味ある所は、此の『アモリ人の山』にして、此處に到着せし時、イスラエル人は將に約束の地を獲しと思ひしが如し。此處より其の地を窺はしめんとて問者を遣したれども、又此處にて彼の不信にして怯懦なる當時の人々が曠野に於て死する様宣告せられ、又イスラエル人は四十年間曠野を彷徨ひし後、此處より再び彼地を獲んとて新に出發せり。『アモリ人の山』は、エト・チーの北東にある高地にして、長さ約七十哩、幅四十哩乃至五十哩にして、北方はベエルシバの附近に達したり。其の中に父祖の歴史また後の事件に因りて吾人の熟知する所少からず。旅行者の記事に因れば、此處は古跡多き地にして、其の遺跡は少くともエジプトを出る時代に溯るもの多し。今も猶アモリ人の古き名稱がアミル又はアモリと稱して到る處に残れり。聖書に記載せる古代の邑の名稱を數千年後の今日まで繼續するを見るのみならず、又アブラハムとイサクが掘りし井を今日も古の名稱にて呼ぶを聞いて感慨なき能はず。此處よりベエルシバへの行程約半にして景色一變し、今迄の曠野と異なり、此處の四圍には以前人の住居せし幾多の證跡を有する廣き谷あり。此處はカデシよりベエルシバに至るまでのネグブ即ち『南の地』と稱せし所なり。近世の旅行者がシナイ半島の各所に於て發見せし古代の遺跡を、イスラエル人の

『曠野』に彷徨ひしこと、否、寧ろ寄寓せし事の證據とせば、其の中の一つは最も注意すべき所なり。此は所謂『ハゼロテ』と稱し、低き石垣を以て圍み、其の間に狹りて荆ある金合歡の樹の密生せる所にして、錯綜せる樹枝と長き針の如き尖端を有せる荆とは完全に入込み難き垣をなすを以て、其の圍の中にある天幕及び家畜に取つては極めて堅固なる要害なりき。屢聖書に記載せる『ハゼロテ』は該地方に夥多あり。

契約の櫃及び神の陣營が夏の初、シナイ山麓より出發せし時、イスラエル人の行先と行進の道筋は以上の如し。モーセの再三の願に應じて、其の義兄弟ホバブはエホバが其の民に降し給ふところの『福祉』に後に與らんこと(民一〇・三二)を信じて、イスラエル人と共に行き、曠野に於て彼等の案内者たることを承諾せり。右は士一・一六、母前一五・六、二七・一〇、三〇・二九等に由りて知ることを得。イスラエル人の全旅行中眞の案内者は雲の柱なりしが、ホバブが該地方に關する知識は泉と林草のある所を發見する上に大に利益ありしことは明白なり。何れの時代に於ても亦然り。吾人は常に雲の動止により先導せられざるべからざれども、先導の方法として人の伎倆と智慧を熱心に求め、且感謝して之を利用せざるべからず。

イスラエル人は三日間『休息所』を見出さずして行進せり。この時彼等は『彼の大にして畏るべき曠野』に既に入りしならん。灼くが如き五月の日光の炎熱は土地に反射し、且行進に疲勞して、飲



用水の乏しき上に家畜に要する糧秣さへも少きに因りて、信仰弱く又より善き國を熱心期待せざる者等は憂鬱に陥りたり。周圍は廣漠たる曠野にして、見渡す限り「休息所」とてはあらざりき。眞に約束を嗣ぐ前にイスラエル人は先づアブラハムの受けしと同じ信仰の試みを経ざる可らざりき。然るにアブラハムは勝利を獲る毎に益々信仰を勵されしが、イスラエル人は失敗に由りて益々嚴重なる警告を蒙り、遂に不信なる當時の人々は罰せられて、約束に與るの喜悅を阻止せられたり。三日路の旅行にて斯くも大に困憊せしが、『民は災難に罹れる者の如くにエホバの耳に眩きぬ』(民一一・一)。然るに爾せしはエホバの嚮導を批難することなれば『エホバ震怒を發し給ひ』、その送り給ひし火『燃出で、其の營の極端を燒けり』。モーセの祈禱に因りて『其の火鎮まり』しと雖も、斯く營の極端にて起りし罰に由りて示されし警告と學び得可き教訓とは尙ほ認められざりき。又モーセが永く此の事件を記憶せしめんとせし其處の名稱タベラ(燃ゆとの意)も更に顧みられざりき。嘗て災禍を取除かれしに由りてパロの心が剛愎になりしが如く、今も亦其の火の鎮りし爲に彼等の靈的感觸は鈍くなりしならん。然ればタベラは直にキプロテハッタワに變りて、以前に營の極端に燃えし忿の火は今營内に烈しく燃ゆるに至れり。

『三日路』と記載せる(民一〇・三三)に由りて、タベラを現今のエルワイス・エベイリグと同一なりとする説は實成し難し。營を張りし場所の記録(民三三・一六以下)にタベラを記載せざるにより、此の二ヶ所は確に同一なりしことは明かなり。

キプロテハッタワに於るイスラエル人の罪は、慾心のためにして、又神が備へ給ふ食物を輕んじ、エジプトの食物を慕ふことを現せり。先にこの慾心を起せし者はイスラエル人と共にエジプトを出し『寄集者等』にして、彼等より此の事がイスラエル人に傳播したるなり。以前エジプトに在りしとさの奴隸の患難辛苦も暫し全く忘却し、唯肉體の必要を充すところの豊富なる食物のことのみ心を奪はれたり。彼等は哭きつ、『誰か我等に肉を與へて食はしめんか』と、其の失望せる慾心の耐へ難くして發せし質問は、右の精神により出でしと思ふの外なし。若し然りしとせば、神の恩に由りて備へ給ひしマナをも輕んずるは當然なり。蓋は恰も其の罪を尙深く認めしめん爲にや、聖書は茲にマナの形狀と、その不思議に與へられしことを再び記載せり(一一・七一九)。モーセは民の一部のみならず一般に『哭く』(一一・一〇)を見、又之に由りて『エホバ烈しく怒を發し給ひし』ことを見て、殆んど絶望せり。然るに祈禱を以て之をエホバに告げしを見れば、彼の言は不信よりせずして深き憂鬱より出でしなり。公平に了解すれば、『此の總體の民は我が姪みし者ならんや、我が生みし者ならんや』てふ言の意味は、其の民の父たり、又之を養ふ者は彼にあらすして神なれば(出四・二二、賽六三・一六)、其の保護は神に託ねざるべからずとのことなり。然りとすもモーセの難關は此の場合試験に相違なかりしも、神はモーセの爲に『之と共に遁るべき道を備へ給ひき』。

神はモーセの願に應じて左の二事を行ひ給へり。先づ慈悲に由りてモーセを扶け勵し、而し



て後その大能と聖潔とを示し給へり。之がためにモーセは、イスラエルの長老中より七十人を、集會の幕屋の入口に多分半圓形に集めんことを命ぜられたり。此の『長老等』は其の後モーセとともに『民の任を負へり』。モーセは嘗て助けられんことを願ひしが、今助を與へられんとす。然れど人の助は益なく神のみ眞の助なることを問もなく實驗せんとなす。而して全會衆の前に於て神自ら其の助を選び、又此は唯モーセを助けんがためなるを示さんとて、『エホバ雲の中にありて降り』モーセと言ひ給ひしが、モーセの上にある靈を以て其の『長老等』にも分ち與へ給へり。今新に與へられし賜の證として『彼等預言せり』。蓋は將來の事を預言せしにあらす、『御靈に感じて語る』の意にして、即ち新約聖書にいふ所の『預言』(哥前一二章、一四章)と同一なり。尙又民をして之をモーセが爲せし異能と思はざらしめんが爲に、同じ靈は同じ結果を以て七十人の中なるエルダデとメダデの二人の上にも降りたり。此の二人は『其の名を録され』即ち其の職に任せられたりしも、何故にや營の中に止りて幕屋の前に出でざりしなり。ヨシユアすらその意味を誤解せしに由りて見るも此の事の必要なりしは明白なり。彼はエルダデとメダデが『營の中』にて預言せしを認めれば、モーセより賜をうけざる彼等が預言することは、モーセの權が之に由りて輕んぜらるゝと思ひ、これを『禁めたまへ』と勸めたり。是は他の弟子等に從はざる一人の者がキリストの名に託りて『惡鬼を逐ひ出』したるを禁じたるヨハネの所爲(可九・三八、路九・四九)と類似するを憶出す。その時主は其の誤れ

る熱心を謹め給ひき。斯の如き過誤は屢ありて、其の譴責は何れの時代の時代を問はず基督教會に於て屢忘却せらるゝ所なり。之に關するモーセの意向は大に異なれり。忠實なる僕として彼は己の榮譽を求めず、只管凡て主の民が同じ靈的賜に與らんことを熱望する旨を言表せり。尙一の要件残り。神は民の必要に備へ給ふことに由りて其の大能を現し、又慈心を罰すること由りて其の聖潔を示し給へり。一箇月間民を皆肉を以て満しめ給ふ約束を始めて聽きし時、モーセすら之を疑ひたる事は特に注意を要す(民一一・一八—二三)。今再び主は自然の方法を以て超自然の結果を生ずるの如何に容易なるかを示し給へり。本書第八章に既に説明せし如く、春季に北の方アリカの中央より鶉の大群飛び來り、アラビヤ灣より東風に吹れてイスラエルの陣營の上に夥しく落ちしが、遠方より飛來りしに由りて疲れ果たる爲なり。『營の四周此旁も彼旁も』大約一日路の距離の間、鶉の山を爲し地の面より高きこと、所によりては大約二キユピト(約三尺餘)の高きに積りたりき。本歴史にて屢學びし教訓と均しく、鶉を吹しめし『風』は『エホバの許より起りし』ものにして、かく鳥の飛び來りて落つることは敢て珍らしからざりしも、其の數は平素見るよりは遙に多かりき。神はモーセの如きものすら思掛けざりし方法を以て不意に救を送り給ふ事を得。然もイスラエルは其の願望を充滿されて餘ありき。今與へられし肉は其の日の爲に足りしのみならず、大部分は後日のために貯藏せられたり(一一・三二)。かくて神は其の備へ給ひし所につきて咳き、或は大能を疑



ひしもの愚なるを示し給ひしが、尙彼等の所爲の不遜と罪を罰するに至れり。記して曰く、『肉な  
は齒の間にありて未だ食盡さざるに、エホバ民に向ひて怒を發し、之を撃つて、大に滅し給へり。  
是をもて其の處をキプロテハッタワ(慈心の墓)と呼べり。其は慈心を起せる人々を其處に埋めたれ  
ばなり』と。イスラエルの中にある敬虔なる者が如何に深くこの罰を感ぜしやは詩七八・二六―三一  
の如き句に明かに現る。同時に何れの時代の人々にも必要な教訓は、左の言に簡單に記載せらる。  
『エホバは彼等の願欲をかなへ給ひしかど、其の靈魂をやせしめ給へり』(詩一〇六・一五)と。

第十八章 ミリアムミアロンの咄くこごーカナンに偵察者

を派遣するこごー其の『惡き報告』―民の反逆こ

その罰―イスラエル人が『ホルマまで』敗北する

こごー

(民一二章―一四章)

從來民の反逆の精神は直接主に對するものなりしが、モーセは其の頃血族的關係なき者等の爲  
に斷えず煩勞することを咄き居りしとせば(民一一・一二)、今や『人の仇はその家のものなるべし』

(太一〇・三六)との言の主意に於る愁歎を實驗せざるべからず。イスラエル人はキプロテハッタワよ  
りハゼロテに進みしが、此の地は附近に石垣の圍多きを以て、今は其の所在を確め難し。此處にてミ  
リアムと恐らくミリアムの煽動によりアロンは、モーセが多分チツボラの死後再婚を約せし『エテオ  
ピアの女を娶りしをもて』之を『誘れり』。これは肉によるイスラエル人の自尊と他國人に對する輕蔑  
の始めて現れしものにして、此は其の召されしことの靈的意義の誤解に比例して、爾後の彼等の歴  
史中に散見する所なり。カルビン曰くミリアムとアロンは預言する能力を與へられしを實際誇りし  
が(民一二・二)、實は却て唯謙遜すべき筈なりしなり。然るにモーセは普通の預言者の如くならず、  
非常に柔和なりしに由りて自己の地位を辯解するを好まざりき(一二・三)、彼が『己を立て給ひし者  
に忠實なりし』は唯特別の一事に於てのみならず、エホバの『全家』即ち神の國に關する總ての事に  
對してなりき(來三・二、五)。是に於てエホバ自ら宣言し、且癩病を生ぜしめ、ミリアムを罰し以て其  
の僕モーセを辯護し給へり。姉と自己の罪を懺悔せしアロンの歎願と、又モーセの執成に由りて此  
の罰を免るゝことを得たり。然れどもミリアムが營の外に禁鎖られしに由りて、他人に勝りて特權  
ありと誇りたる者すら、イスラエルの陣營中の普通の交際をさへ絶たれしことを吾人に教ゆ。

此はミリアムの名をアロンの名の前に記し又ヘブル原語の民一二・二に『彼(女性)ミリアムとアロン、モーセを誇りて曰く』と  
記載するに由りて推量すべし。



ミリアムの禁鎖の七日間は経過し、イスラエル人は續いて約束の地に向ひて行進し、殆んど其の境界に到着せし際に、當時の歴史の回轉期を劃するのみならず、別してイスラエルの將來を預表せし事件起りたり。そは當時の人々が不信のため約束の地に入る間際になりて之を占領するを拒み、且神に反逆し、又モーセの權に服従せざりし如く、其の子孫も亦イエス・キリストに由りて其の約束の成就を拒み、神が君とし救主と崇め給ひし者を信認せずして、此の人を「除け、除け」と叫べり。又反逆者の屍が曠野に横はりし如く、「其の血は我等と我等の子孫とに歸すべし」との畏るべき叫に應じて、之に似たる靈的審判を蒙りたり。然るに神は頌美べき哉、彼の反逆時代の子孫が將來憐憫を蒙らんとせしが如く、神の預定せる時期に臨んでイスラエル人は再び主に歸り、又父祖に與へられたる約束を樂むに至らん。

此の永久に記念すべき事件の行はれし所は、『バランの曠野』にして、猶詳しく其の地方を言へばカデシバルネア(民一三・二六、申一・一九)なりき。該處は之を研究する旅行者等により初に確證せられ、又バアマ博士により詳論せられたれば、此の事件の進行を順序を追ふて研究することを得。カデシは現今のアイン・ガデス、即ちカデシの泉にして、バランの曠野の北東の高地にありて、アモリ人の要害とせし所なり。北方は僅か隔ててネゲブ、即ちパレスチナの『南の國』と界す。此は既に説明せし如く、ベエルシバに達し約束の地の界なり。此處は牧畜に適當の地にして、以前に人の住居せし跡

多く、北方には又葡萄を作りし跡もあり。彼の偵察者がその地の豊饒なる證として葡萄の房を持歸りしエシホルの谷は通例人々が想像する如く、ヘブロン近傍にあらずして此の處なりしと思ふ。カデシはアイン・ガデス(ガデスの泉)が湧出る絶壁の下なる平地にして、東方に山脈あり、西方に廣き平野ありて、カナン人は此處にてイスラエル人の行進を待構へしにより、偵察者はカナンの軍を避けんがため、そのネゲブ即ち『南の方に赴かん』とせば、『山に登らざるべからざりき』(一三・一七、二二)。故に彼等は迂廻してアイン・ガデスの南を繞りて、聖書に記載せるチンの曠野を通過し(二三・二一)、其處より山に登りたり。斯くて此の事件の行はれし場所を知るの必要を認むべし。

\* カデシは元來エシホル(葡萄酒の井)と稱し(創一四・七)、又エシホルに由りて、現今のアイン・ガデスと同一なるは容易に認むるを得べし。

× エシホルに言はへブル原語にて葡萄酒の房との意なり。

さて物語に歸りて陳べん。申一・二二に由れば、『其の地を伺察はしめんとて偵察者を派遣せんとの提議は元來民より出でしものと見ゆ。モーセは神の許可を得て(一三・一)之を承諾したれども、土着の人を恐れざらしめんとて『勇ましかれ』との警告を與へたり(二三・二〇)。之がため諸支派の『長等』の中より信仰上に於ても他の點に於ても最も適任と思ひし十二人を選びたり。(其の名を調ぶれば支派し『牧伯等』と異なれり。參照一三・四—一五と一・五以下、七・一二以下)。此の十二人中



吾人の知れるはカレブとヨシユアのみにして、ヨシユアは『モーセの從者』にして始めはホセア即ち『助』と稱せしが、後モーセ之をヨシユア即ち『エホバは助なり』と名けたり。偵察者等は既に詳細の命令を受けし後、『葡萄の熟し始むる時』、詳言すれば七月下旬イスラエルの陣營を出發して、次の好果を得たり。即ち彼等はカナン人を避けてパレスチナに入り、最北方の界なる『ハマテに近きレホブに及ぶ』ところのコーエレ・スリヤの平野までを偵察して歸る時、北より來りしにより嫌疑を受けざりければ、ヘブロンに沿ふて下り、山の西端に於てネゲブに至る行路を踏査したるが、今日幾哩もなく耕作せる葡萄園を目撃する廣き谷、多分ハネインの谷の邊にて、彼等は神が彼等の産業として約束し給ひし地の如何に好適の地なるかを證せんとて、大なる葡萄の房と、柘榴と無花果を取り、四十日を経過して陣營に歸來せり。彼等の齋せし土地の豐饒の報告と、證據とは神が嘗てイスラエルになし給ひし約束を確證したり(出三・八)。然るに猶左の言を加へて曰く、『然りながら其の地に住む民は猛く、其の邑々は堅固にして甚だ大なり。我等またアナクの子孫の其處に居るを見たり』(民一三・二八)と。彼等は之を恐れて(二三節)洪水以前のネピリム(創六・四)と同一なりとせるが如し。

『アナク』は種族の名にして、カナン人がパレスチナを占領せし以前の先住民の殘存者なりしかと思はる。アナクは『頭長』の意ならん。

右に由りて民は直に甚く恐懼を懷きしが、カルブは之を鎮めんとせしも能はざりき。人々は却て

カルブを排斥せんとするに由りて他の偵察者等は益々自説を主張し、イスラエルは假令其の地を有すとすも其の地は『民を呑みつくす』者なりと云へり。此は其の地と近接せる地は常に之を獲んとて隙を窺ふ好戦者等の住所なりとの意味なり。かくカルブとヨシユア(モーセと密接なる關係ありしたために其の證言は重んぜられざりしならん)を除けば、十二支派の中の最も信用すべき又豪勇なりし者等も、態々エジプトの安逸を棄て、『大にして畏るべき曠野』の困難と危険とを忍びたる久戀の地は、之を占領すること能はず、假令之を占領するも保有すること能はずと斷言せり。其の夜民はいたく落膽し、公然モーセとアロンに反しのみならず、エホバにまで逆ひて新に首領を選び、エジプトに歸らんとせり。茲に於てモーセとアロンは、全會衆の前に於て神の前に『俯伏し』、ヨシユアとカルブは慨歎の餘り『其の衣服を裂き』、民に向つてエホバ偕に在し給ふにより、必勝疑ひなしと諭したるも効なく、昂奮せる民は唯石を以て彼等を撃たんとしたり。『時にエホバの榮光會衆の幕屋の中よりイスラエルの全體の子孫に顯れたり』(民一四・一〇)。エホバは今にも民を悉く即座に撃ち滅さんとし給ひし其の時、モーセは再び調停の勞を執れり。是れ恰も神の民の大指導者大仲保者の表象といふべし。彼は以前よりは一層熱心なる懇願を以て神と争へるが如し。即ち神の榮光と從來の待遇を憶起し、殊に神の恩恵の大なること、又之に關して神が嘗てモーセに其の『名』を宣べ給ひし時(出三三・一七、一九)、己の性質の深遠なるを示し給ひし言を想出し、短き切々の



辭を以て熱烈に縷々懇願したり。神は後の大仲保者とその大懇願を象徴する願を聴容れ給はざるを得ざりき。蓋は遙か後に、イスラエルの子孫は悉く救はるゝ筈なれども、イスラエル人がイエスの血は彼等と其の子孫に係はるべしと言ひし時、頑硬にして叛ける者等は永く嚴罰を受けしが如く、カデシに於ても亦然りき。偵察者等がかの地を窺ふに四十日を経たれば、其の一日を一年として四十年の間、噴野に流離ふことゝなれり。而してエジプトより出し人々のうち二十歳以上の者は、カルブとヨシユアを除けば一人も約束の地に入るを得ず、其の屍は噴野に曝さるべし。又彼の十人の偵察者等には忽ちにして滅亡その上に臨み、「罰をうけてエホバの前に死ねり」。

\* レビの支派が他の支派と共に戸籍調査を受けざりしは(民一章)、噴野に於て死ぬべき者の中に數へられざりしが爲と見ゆ(民一四・二九)。書一四・一以下をも参照すべし。ラビ等はイスラエル人が十回神を試みたりと文字通りに數へたるは(民一四・二三)、甚だ空想的なることは言ふを得たり。

此の神の審判の始まりしことと、其の現實の豊富なる證據、即ち殊に十人の偵察者等が忽ち亡きれしも、カルブとヨシユアとが生存せしことは頗る奇にして意外の感を生じ、何れの時代の教會に於ても之に類似することあらずんば、殆んど理解し得ざることならん。イスラエル人今や何を爲すべかりしや、若し進みなば彼等は約束のものを受けたりしは明かなり。昨日は景しく且物の豊富なりし約束の地に近づきて、其の處の山より眺望するを得たれば、既に彼等の有に歸せしが如

くなりしも、嗚呼今日之を失ひたり。目のあたり之を實見する者一人もなく、加之彼等の屍は噴野に曝されんとす。その理由は彼等が單に昨日進むことを好まざりしが故なり。今日こそ率行かん。昨日過ちしとするも、今日改めなば可なり。神はイスラエル人に對して約束し、又彼等を其の地に導かんとし給ひしにあらずや。然れば彼等は猶イスラエル人なれば、今進んでイスラエル人の産業を求むべきなり。されど事實は然らざりき、斯る場合に於ては常に然りとす。吾人の逆反と不信の邪曲は正反對なることを爲すとも必ず正となるにあらず。そは兩者に於る動機は同一なることあり。單に信仰に由らざる従順は自信にして、不信と自負に異ならず。仇に勝ちて安全を得、又地を占有するはイスラエル人が斯々の事を爲し、又は外部に何々の事情を備ふれば可なるにあらず。エホバが彼等の中に在し給ふによるのみなり(民一四・四二)。常に勝を得るは唯信仰によるのみ。即ち肉體上のヤコブの子孫に與へられし死せる約束に因らず、活ける神が己を信するイスラエル人の中に在し給ふに由りて契約の福祉を受くるなり。イスラエル人が明日、山に登り行きて其の過去を回想せんと決心せしことは、大なる靈的無智と其の地を嗣ぐに不適當として論ぜられ、かの偵察者等の報告に由る怯懦と逆反と同じく、謀叛と罪惡とを包含するものなりき。

モーセは是等の事を民に懇ろに勸告せしが、彼等は之を肯んぜずして『自擅に山の巔に登れり』。然るにエホバの契約の櫃とモーセとは營を出でざりき。後に其の敵は『彼等を打敗り、ホルマまで追



ひ到れり』。ホルマはカデシを距ること約二十哩なり。旅行者の記事に由りて知らるゝ如く、イスラエルの軍旅が南の地に進むに従ひて益々其の地の膏腴なると耕作の行届ける文化の有様を見たり。且アブラハムとイサクに關聯して彼等には神聖なる發祥の地なる郷里に近づきしを感じたり。そはホルマの少しく北方に當り、アブラハムとイサクとが堀りしレホボテとシテナとベエルシバとの井ありしが故なり。これは現今にてはルヘイベ、シユテナ、ビル・セバの名を以て記念せらる。アブラハムは自ら『南の地に至りカデシとシユルの間に居り』(創二〇・一)しが、イサクも亦其の足跡を踐めり(創二六・一七以下)。其の後此の地を有せしアモリ人の遺跡尠からず。殊にホルマの近傍に於て然りとす。士一・一七に由れば此の邑といはんよりは寧ろ之を守る砦は、元來ゼバテ(觀望樓)と稱せしを知る。ホルマ(呪詛)とは後にアラデ王が攻來りし後、イスラエル人がカナン人の城邑を悉く滅さんと『誓願を立て』たる時に名けし所ならん(民二一・一—三)。ゼバテてふ名稱はセバイタてふ場所の古跡に由りて存せしが、バアマ―教授は其の近傍に於て古の『觀望樓』を發見せり。此はセバイタを見下す山に建てたる堅固なる城砦なりき。後の時代の城砦の遺跡中に斯る古代の遺跡を發見するは興味甚だ多し。此の古跡はゼバテの古跡を現すのみならず、アモリ人とカナン人とが守備してイスラエル人を攻撃せんとして進軍せし城砦の跡をも現すやとも思はるればなり。尙又現今に至るまでセバイタの北なる谷は、テイガト・エル・アメリン即ちアモリ人の峽谷と稱し、又其の城砦の南西にあ

る山脈はラス・アミル、即ち『アモリ人の頭』又は嶺と稱するに由りて、『アモリ人の山』なりしを確證せらる。

イスラエル人はエホバ在し給はず、契約の概なく、又モーセを伴はずして、自擅に此の山の嶺に登りたり。彼等はエホバ偕に在し給はゞ表面弱しと思ふことは、却て眞に強きものなることを昨日教へられたり。今日は彼等の外見上強しと思ひし所は、却て弱きことなりとの教訓を苦き經驗によりて知り得たり。即ち敵に撃破られてホルマに逃れたればなり。

第十九章

三十八年間曠野を彷徨ふこと—安息日を犯す者

—コラと其の黨類の反逆—民の咄くこと、疫病及び之を止むること—アロンの杖が芽を發して花咲き果を結ぶこと

(民一五章、三三章一九—三七、申一章四六—二章一五、民一六章、一七章)

青年等が約東の地を嗣ぐべく成長するまで三十七年以上を、『パランの曠野』を彷徨はんとす。そ



の長年月中の事件に就て聖書に記載する所は殆んど一もなし。某獨逸の著者は之に就て曰く、イスラエルの人々は既に刑罰の宣告を與へられたれば、之を聖書歴史の題材たらしむる値なく、又イスラエルの生命と希望との中心たる青年等は未だ其の歴史なかりし故なり。然ればこの時代の特色は青年の生命よりも老人の死により、又イスラエル人の流浪の歴史は彼等の屍が曠野に横はりしゆゑ、後に遺されし墳墓に由りて知るの外なきなりと。

然れども當時に就て聖書に散見する種々の記録を集めて比較研究するは有益なるべし。第一イスラエル人は「日久しくカデシに居れり」(申一・四六)、而して後「紅海の途より曠野に進み行けるを知る」(申二・一)。此のカデシより最も遠き休息所は、紅海のエラン灣の邊なるエジオンゲベルなりしと見ゆ。此處より四十年間流浪ひし後、再び「カデシのチンの曠野」に歸れり(民三三・三六)。カデシよりエジオンゲベル迄の間にて流浪ひし各驛は民三三・一八一三五に記載せり。リテマをいでし後の驛は十七箇所あり。リテマはレテム即ち金雀枝の意味にして金雀枝の谷の意ならん。此所はカデシに近くイスラエル人の營を張りし所ならん。實際現今もカデシの近傍にアブ・レテメテと稱する平野あり。カデシ即ち聖所或は「潔め」の場所は元來エン・ミシバテ(鞠の井)と稱せしが(創一四・七)、其處に於て行はれし事件により、カデシにバルネアを加へて獨特の名稱カデシ・バルネアと呼びしは、或は以前の名稱寧ろ流浪ふ地の意味なるに由るならんと思ふ。「金雀枝の谷」に營を張りしは確

に草木と川ありしが故なりと推測す。イスラエル人が流離の中留りし十七驛の名稱を研究せば、何れも其の近傍に水と草木ある所を選びて營を張りしことを知る。一例を擧ぐれば、リンモンパレツ(「柘榴の裂目」)はユラが反逆のために嚴罰を受けし所ならん。リブナ(「白き」)は其處に白楊の繁茂せしがため斯く稱せられしならん。リツサは「露」を意味し、シャベル山は「美しき山」、ミテカ(「甘き」)は其處の水甘きが故なりならん。ハシモナ(「肥沃」)或は「豊饒」は現今も滾々と湧出づる清冽の池ありて其の周圍に草木繁茂せり。ペネヤカン即ち 申一〇・六に由れば「ヤカン人の井」と稱せ

或は「曠はす」との意あり、詩二九・八に記せる「エホバはカデシの野を曠はせ給ふ」とは之を指すとの説あり。

申一〇・六、七に四驛を記載すれども、民三三章に記せる順とは異なれり。民三三章に三十七年間復ひし時、カデシとエジオンゲベルの間に營を張りし所の目録を明記せり。然るに申一〇・六、七に記載せるは、四十年目に(再びカデシに止りし後)カデシに入らんとてカデシよりホル山に行進せし時のことなり。然れど申一〇・六、七に異なる物語を挿入せるは説明を要す。一五にモーセは、神が彼の祈禱に應へて其の契約を回復し給ひしことをイスラエル人に憶起さしめしが、六、七の兩節を加へしは、契約を回復せしのみならず、祭司の長の仲保的任務の再び立てられしを表さんが爲なり。神は斯くアロンを引續き任用し給ひしのみならず、彼がモセラにて死せし時、その子エレアザルを任用し給へり。イスラエル人が引續き前進せしは即ちエレアザルの任期中にして、モーセは之を詳細に説明せず、唯其の事件の歴史上の事實をイスラエルの子孫に憶起さしめ(六、七節)しに過ぎず、その意のある所は自ら明かなり。



しは、ヤカン人(創三六・二七、代上一・四二)がエドム人の爲に原の住所より逐出されし時堀りたる井のありし所ならん。ヨテバタは『善き事』、エプロナは『渡場』なり。其の他風景の特徴或は其處にて行はれし特種の事件によりて名づけられし所あり。例之ばケヘラタは『集る』、マケロテは『集會』、ハラダは『恐懼の場所』などなり。

これらの驛の多くは概ね見出されしかども、之につき近世の研究者の説を茲に詳細に説くこと能はず。

是等の驛の少き事と、其の位地とよりして感ずる第一の印象は、次々に營を張りし期間の長かりしことなり。且原文の或る言に由れば、民は幕屋及びレビ人を以て中心陣地又集合陣地として、三十八年間諸處に離散せられたりと見ゆ。又當時イスラエル人が流離ひし地方が、斯る多數の遊牧の民と家畜とを支ふることを得たるは明白なり。實に水ありしを以て若し之を利用せば、其の曠野の何處に於ても常に豊饒なる圃を開墾することを得べかりしなり。此の點に關してイスラエル人がエジプトにて灌溉法を見學せし事は大なる利益なりき。最後に言ふべきは、そこは全く無人の野にあらざりし事なり。其は東洋とエジプトとの間の大道に近きのみならず、ベネヤカンの如き他の種族と接觸を保ちしが故なり。申一・二六―二九に由れば常に食料と水を買ふことを得、又同書二・七に由れば『この四十年の間、乏しき所あらざりし』のみならず、物資も富も大に増加せしことを見る。更に同八・一四以下、二九・五及び、尼九・二一に由れば、神が當時其の民の必需品を豊に備へ給ひしことは明白

にして、又未來に關する預言的幻想中特にイザヤによるものの中に、曠野に於るイスラエル人に對する神の恩寵的待遇を回顧せしこと數次あり。

斯る事の最も著しき例は賽四三・一六―二一にあり。されど或人の信する如くイスラエルの曠野の中には海岸或は海岸に近く張られしものありしも、詩七四・一四を紅海のエラン灘より魚を鹽しことを指すとするは誤謬なりと思ふ。

此の三十八年間の記事甚だ少しと雖も、神に逆ふ二事件を記載せるあり。其の一は『安息日に柴を拾ひ集むる』ことにより、公然神の律法を犯したる人の記事なり(民一五・三二―三六)。斯く『故意なる罪』を犯す者は死刑に處せらるべしと既に定められたれども(出三一・一四、一五、三五・二)、此の犯罪者は先づ『之を禁錮め置けり』。此は其の罰は規定せられたるも其の方法は未だ示されざりしが故に、一は特に神の示諭を窺ひて聖名を崇め、一は多分イスラエル人に其の嚴なるを知らしめんが爲なりき。何れの點より見るも、適法に主の目を遵守するはイスラエル人に取つて最も肝要なりしが故に、神の示諭に従ひて其の犯罪者を『營の外に曳き出し、石を以て之を擊殺せり』。此の事件の起りしはイスラエル人の流離時代の何時頃なりしやを記載せず。唯エホバに對して『故意なる罪』を犯すことを禁ぜし後、直に其の一例として記入せられたるなるは明かなり。神の言を公然輕んずる此の罪は、神の民の中より『絶る』、『罰に當れり』。

其の二はコラと其の黨類(民一六章)と後には民も亦大體之に参加して(一六・四―一五〇)、モーセ



に逆ひたることにして、前者よりも遙に重大なる事件なれども、其の行はれし精確なる時は前者と同じく詳ならず。併し『流離』の初期にリンモンパレットにて起りしものと推測すべき理由なきにあらす。此の反逆の首領はアムラムの兄弟イズハル(出六・一八)の子孫にしてアロンの近親なるレビ人コラと、三人のルベン人なるダタン、アビラム及びオンなり。然るにオンのことは尙他に記せることなければ、早く其の黨類より脱せしものならん。此の人々は他の支派の『會衆』の中に選まれて牧伯となれる所の名ある人々二百五十人を誘ひたり。斯してこの暴動は既に大規模となり一般の不平不満を現せり。此の陰謀の動機は明白にして嫉妬と希望の果されざるに由れども、叛徒は更に高尚なる信仰上の目的のためなりとせり。コラはアロンの兄弟より出でたればアロンのみ祭司の長たるを好まず、且其の正當なる理由をも認めず、否自ら其の職務を希望せしやも計り難し。又自己に關する不平をも抱きたり。レビ人中聖所にて最も重要な職守に任せられしコハテの族の一人なれども、コハテ人には四の族ありて(民三・二七)、其の長に任せられしものは其の中最も若きウジェル人の族なりき(三・三〇)。此は不義不公平なる處置にあらざりしや、又コラ自らそれがために損害を受けざりしや。コラが盡力せしに拘らずレビ人は一人だも其の黨與に誘はれざりしは、彼等レビ

\* マナセ人ゼロベハデが『コラに與せざりき(民二七・三)』と記載せるより見て、其の與せし者等は諸支派のものなりと推測するを得べし。

人の爲に賀すべき哉。コハテ人とコラの天幕は營の南方を司りしルベンの支派の營に近かりき。コラの天幕は多分ルベン人の牧伯ダタン、アビラム及びオンの天幕と相隣したりしならん、其の罰の物語に由りて爾ありしかと察せらる。ルベンも亦不平を唱ふべき故なきにあらす。ルベンはヤコブの長子にあらずや。然れば諸支派の長たるべきものは彼を除いては何人ぞ。東洋人の心に嫉妬の炎を燃すは容易のことなりき。モーセ何者ぞ、又彼が代表するレビの族は何者なればイスラエルの上に權をとるや。これ確に痛歎すべき不祥事にして又赦すべからざる僭越なり。しかも之がために心に心を動したるはルベン自身にして、延いては他の凡ての支派も同様に感じたり。此の一事は多くの牧伯等が容易く陰謀に参加せしこと、モーセがコラに忠告せしこと(一六・八一—一)、又ルベン人の詰責に對し彼が憤然神に訴へしこと(一五節)等をよく説明するものと言ふべし。叛徒は明かに斯く言へり。曰く『汝等は其の分を超ゆ』、即ち汝モーセとアロンは祭司の職と政治の權を十分久しく握りたり。『會衆皆盡く聖者となりてエホバ其の中に在するに、汝等尙エホバの會衆の上に立つや(一六・二)』と。彼等は其の我慾と野心の動機を隠さんと言ひ立てし口實は、全イスラエルの靈的祭司職に外ならずと認めらる、高尚なる靈性に関する事なりしを知るべし。然るに之より述べんとする如く、彼等の之を要求せしは祭司の長の預表的仲保に基かず、肉に屬するイスラエル人たる立場に基きたり。



此の事件の歴史の全部は實に悲むべく、之に繼いで起りし刑罰は恐るべきものにして、新約時代の教會に於るアナニヤとサツピラの受けし刑罰を除けば之に類似するものなし。此の反逆は聖書中屢引用する所なれば、今之を詳細に研究せざるべからず。抑も此の事件は彼の首領の名を取りて普通コラの反逆と稱し、無論神の指揮に直接反對せしのみならず、此の反逆に現れし主義は舊約の全計畫と全く異なれり。若し之を實行せしならば其の契約の象徴的特點を悉く破壊すべかりしなり。イスラエル人は皆聖者また祭司なりしは事實なれども、此は生來或は國民的資格に由るにあらず。彼等を神に近づかしめ、又神に對して彼等の仲保たりしアロンの象徴的祭司たる功績によれり。尙又アロンの祭司職は凡て之に類似する例に於る如く、神を拜する場所、時期、香の調合、諸の犠牲等の如き、第二義のものもなきにしもあらざりしかど、先づ概ね神の命令に由るものなりき。例之ば「エホバは其の選り給へる者を己に近づかしめ給ふべし」(一六・五)。「エホバの選り給ふ人は聖者たるべし」(七節)。凡て神の選り給はざる役事、火、場所等は如何に善く且如何に熱心なるも、異なる役事、異火、異なる場所なれば効なし。此は凡て是等の用意を象徴する意味のために必要なりき。そは茲に論ずる人又は物の自然に適應するがためにあらず、神の指定に由るなり。然らさんば此等は象徴にあらずして、自然の結果なるのみ、即ち神の聖旨に適ふ役事にあらずして唯合理的のものなるのみ。神が靈的實在と連結せしめんとて地上の儀表を自ら定め給ふは象徴の要點なり。

最も些少なる點に於てもイスラエルが盡さざる所あらば、これ神の指定に背反せしものなるのみならず、神の事を變へて人の事となして其の全體の意を空しくするものなり。其の象徴は言はゞ宛ら現在にあるが如く、將來の靈的實在及び之に關する凡ての思を共に顯すものにして、神の自ら備へ給ふ鏡の如きものなり。然ればキリスト來り給ひしとき凡て斯の如き象徴は廢りたり、これ彼等の指示したる實在既に世に來りしが故なり。

此の枝葉の物語はコラの歴史を正當に理解する爲と、舊約聖書の象徴的寓意を理解するに必要なりと思はる。されど今本題に歸らん。此の反逆の翌朝モーセの言に従ひ、コラ及び其の黨類二百五十人は幕屋の門に集會し、其處にて各自「火盤をとり、其の中に火を入れ、その中に香を盛りたり」。コラは彌勢力を得しかば、モーセとアロンに敵せんとして今は全會衆を悉く集めたり。此の時「エホバの榮光全會衆に顯れ」て神の怒あはや彼等を直に焼き盡さんとし給ひし利刑、モーセとアロンの執成は再び其の効を奏したり。「神よ、一切の血肉ある者の生命の神よ、此の一人の者罪を犯したればとて、汝全會衆に向ひて怒を發し給ふや」との言を以てモーセは、カルピンの言ひし如く「神は宇宙の造物主なれば、其の創造せし人間を滅亡し給はず、却て御手の工なるものを憐み給はんことを祈りつゝ創造の神に訴へたり」。然れば此の如き神に造られしものなるに由りて、言ひ難き特權と憐憫を願ふ理由あるなり。



火盤を持てる反逆者を幕屋の門に残し置きなれば彼等は甚く驚きしことならん。モーセは長老等を伴ひ、ダタンとアピラムの天幕に往きけるが、會衆は彼に従ひたり。其の前日彼のルベンの族の二人はモーセに面會するを拒みて、モーセに意地悪き返事をなして汝は民を欺くものなりと言ひたり（一六・一四）に「汝此の人々の目を抉り取らんとするや」と云ふ言は其の意を現せるなり。即ちダタンとアピラムは其の妻子等と共に天幕の門口に出來り起ちてモーセに挑戦せり。モーセは民に彼等を離れ去るべきことを勸告したり。是に於て新らしき嘗て聞かざる左の罰は宣告せられ、立處に罰は課せられたり。地其の口を開きて此等の反逆者と、其の家族の者にして彼等の罪に與したる者を吞盡せり。コラも亦同じ罰を受けしと見ゆ。然れど神は父の罪の爲に其の子を罰し給はずとの宣言（耶三一・三〇、結一八・一九、二〇）の眞實なると、コラの子等が死せざりしは父の反逆に與せざりし爲にして、又レビ人の敬虔なるを現す適切なる證據なり（民二六・一一）加 之後代のサムエル及びヘマンはコラの子孫にして（母前一・一、代上六・三三―三八）、又其の子孫中には『イスラエルの善き歌人』ありて、神の感動を受け彼等の咏じたる歌は何れの時代の教會にても誦ふものなり。『コラの子等』の詩は凡て其の家に降りし嚴肅なる審判より學びし教訓を反響する如き、共通の特徴を有せり、即ちエルサレムにて統治め給ふ王たる神を讚美し、又神の聖所の役事を慕ふは彼等の義務なりといふこと是なり。『香を供へたる者二百五十人』に就ては『エホバの許より火出で』、嘗てナダブとア

ピウを燬き滅せし（利一〇・二）如く、彼等をも『燒き盡せり』。其の火盤は神に獻げられたるものにして『聖くなりたる』ものなるが故に（民一六・三七）、此の事件と其の教訓を永遠に『イスラエルの子孫の記念』とせんがため、打展して燔祭の壇を包むことにしたり。

想ふに、民一六章及び二六・二〇、一一を見れば、コラも如何なるやを見んとて會衆に従ひ行き、二百五十人の牧伯等を幕屋の門に残せしと見ゆ。コラの天幕若しダタンとアピラムの天幕に接近せしならば、此の事件の一切は尙理解し易かるべし。

下の十一篇の詩はコラの子等の作と稱せらる。即ち詩四二篇、四四篇、四九篇、八四篇、八五篇、八七篇、八八篇なり。而してコラの子等のことを更に記す所は代上九・一九、二二・六、二六・一一―一九、代下二〇・一九、尼一・一九等なり。

反逆者等に對する著しき神の刑罰は之を目撃せし者に甚く恐怖を感ぜしめしかども、改心の結果なる眞實の悔改に至らざりき（詩四・四）。嚴なる印象は須更にして過去り、『翌日』に至れば民は、各支派の獨立を主張せし支派の多數の牧伯等が、モーセの爲に滅亡されたりと考ふる外なかりき。民は此等の人々の死せしは彼等の爲なりしと論ぜり。又牧伯等の天幕に於る悲哭と其の前日までコラ、ダタン、アピラムの天幕のありし場所の昨日に變る寂寥を見ては、此の事件の爲に奴隸の鞭が永遠に國民の上に打付けられたりとのみ深刻に思ひ做せり。彼等は神のなし給ふ目的と意味を認めざりしが、此は靈的に辨別すべきものなり。唯エホバより罰の降りしは假にアロンとモーセの願に由らざりしとするも、兩人を擁護せん爲なりしと思ひたればなり。民は甚だしく恩を知らざりしに因りて彼



の二人の仲保の懇願なかりせば、コラの抗辯の爲に全會衆悉く滅ぶべかりしことを忘れたりしなり。その時代は、彼等の中一人もカナンの地に入るべからずとの神の宣告の如何に公平なるかを如實に證明したり、且彼等の行爲が(昔のエサウのそれの如く)、如何に全然約束を嗣ぐに足らざるかを彼等に示したり。

會衆復び集合して、不法無情にもモーセとアロンに向つて咬きて、『汝はエホバの民を殺せり』と迫りたる時に、二人は其の助の出でしところ、今又助を求めしところとして、覺えず『集會の幕屋を望み觀たり』。彼等の斯くなせしは空しからず、幕屋の上にある雲は益々近くなり愈々密くなりて、其の中よりエホバの輝ける榮光忽ち顯れたり。モーセとアロンが幕屋の庭に入りし時、『エホバ、モーセに言ひ給ひけるは、汝等此の會衆を離れて去れ、我直に之を滅さんとすと。是に於て彼等二人は俯伏しぬ』。モーセは此の時に當りて如何なる歎願をなすべかりしや。『そはエホバ震怒を發し給ひて、疫病既に始まりたる』ことを知るを以て、今何の言ふべきことあらんや。ホレブ山の反逆に於ても(出三二・三一)、カデンに於ても(民一四・二三以下)、又前日コラの抗辯の時にも、モーセは種々辯解して最早辯疏の辭もなきに至れり。斯る困難極まる時、信仰すら己に何の暗示をも與へ得ざる時になりて、イスラエルは恰も滅びんとする際、神の備へ給ひし充ち足れる代理的仲保的贖罪は現れたり。即ち未だ預表に過ぎざれども、その意味はこれにて足れり。犠牲の献げられたる

燄祭の壇より取りし火を以て焚きし香は、我等の大なる祭司長が神の嘉納したまひし仲保的執成を預表せり。然れば地上に於ては歎願し得る理由毫もなしと雖も、預表的に祭司長の全き義と執成に依頼するに因りて望を達せり。アロンがモーセの命に隨ひ火盤を執り壇の火を之に盛りて、『會衆の中に奔行き』、『香を焚きて、民のために贖罪を爲し』(一六・四七)たる時ほど、前にも後にも舊約時代に於て嘗て斯く迄に、福音を宣傳へられたることなし。かくアロンは火盤を手を持ちて『既に死ねる者と尙生ける者との間に立ちければ』、『既に一萬四千七百人を滅せし』疫病は『止みぬ』。此の如く疫病の起りしはコラが祭司の任務を奪はんとせし爲なりとせば、其の止みしは預表的なる祭司職の任務を執行せしによるなり。

之に似たる他の唯一の例は銅の蛇を擧げしことなり。是は吾人の醫主の事業の他の點を預表せしものなり。イザヤの預言と雖も此の事件に於る二の教訓程には明瞭ならず。一はアロンの祭司たることの預表的意義と其の効力を指し、一は罪と不義を取除くに就きて神の準備し給ひし所及び其の完備を指せばなり。

然るに此の際神が民に教へ給ひし眞理は、罰に由りて現さるゝもののみにはあらざりき。恰も暴風と地震の後に『靜なる細微き聲』あるがごとく、アロンの祭司たる預表的の意味は、最も美しき象徴に由りて顯されたり。神の命に従ひ十二の支派のために、各支派の牧伯各自の名を記せる『杖二十』普通の説に由れば、擧へ行し杖は十二本ありてエマライムとマナセは一の支派即ちヨセフの支派を表せりと。他の説に由ればアロンの名を記せるレビの杖は十二本の外にありしと云ふ。



二本を執りて至聖所の契約の櫃の前に置き、翌日モーセ聖所に入りて「視るに、レビの家のために出せるアロンの杖芽をふき、蕾をなし、花咲きて巴旦杏の果を結べり」。此の出来事の象徴的の教訓は明白なり。此等の「杖」は何れも牧伯の杖なれば支派とその支配権を表せり。イスラエルの凡ての牧伯は其の資格ありしかども、彼等の杖はアロンの杖同様に幹より切られたるものなれば、神の聖所に於て芽をふき花咲き、果を結ぶことを得ざりき。然れば生來に於てはアロンと他の牧伯等は相違せる所毫もなく、皆均しく新しき生命の果を結ぶこと能はざりき。是故にアロンの杖の特典は神に選ばれ、又不思議なる業をすす能を與へられしことにあり。茲に於て舊約に於ては象徴的に、新約に於ては實際に、其の杖は同時に枝を生じ、花咲き、果さへも結びぬ、即ち三者同時に成し遂げられたるなり。かくて牧伯等「各自己の杖を取れり」。唯アロンの杖は律法の櫃の前に再び携へ來り、「徴」の爲に其處に留置かれたり。又他の樹よりも早く花咲く巴旦杏を選びしは深き意味なきにしもあらざりき。そは「ヘブル語にては他の樹より先に花咲きて果を結ぶ巴旦杏は、『目を覺す者』との意なればなり(耶一・一一、一二參照)。かく『早く目を覺す者』として其の芽と花と果を結ぶアロンの祭司たることは、義の太陽が『其の翼には醫す能を備へ』て昇らん時の更に優れたる祭司を預表せるなり。櫃がベリシテ人の諸邑より歸りし時に、マナを藏めたりし壺とアロンの杖とは明かに失はれしと見ゆ(王上八・九を見よ)。此の紛失は意味深遠なり。神は之に由りてイスラエルの衰微せる有標を示し給ひしが如し。

民一七章より以下にレビの族に關する條例を記せる意味は、注意深き讀者には明白ならん。此處にて之を論すべきに非ず。

第二十章 イスラエル人が再びカデシに集合するここ—モ  
—セミアロンの罪—エドムに使を遣すここ—ア  
ロンの死—イスラエル人がエドムの界より退く  
ここ—カナンの王アラデに攻めらるるここ—

(民二〇章、二一章一—三)

イスラエル人が三十七年間流離ひし後再びカデシに集合せしは最も宜しきに合へり。そは偵察者が悪き報告を傳へし時彼等は不信と反逆を起し、それが爲に離散せしめられしは此の地なればなり。又當時の人々は長年月を経るまで恰も死刑に處せられし如く曠野に逐歸されて、艱難多き憂き年月の過ぐるを待ち居たればなり。今や青年等は再びカデシに集合し、嘗て前代の人々が絶たれし所より新らしく出發せんとす。神は其の目的に對しては眞實にして中止し給ふことなし。前代に行進の停りしは神の方にて失敗し給ひしにあらず、人の不信と反逆とによれり。神は再び其の工をなし給ふ時に、前に停りし所より始め給へり。人も又新に約束の地を目指して進み行くに先ち、彼が神を離れ又宣告をうけし所に一旦立ち歸らざるべからず。彼の青年等が今此地に立ちて父祖等が停められ



たる地に向つて、再び進行せんとする際の意思は甚だ嚴肅なりしならん。神はカデシに於て刑罰を以て御名を聖ならしめ給ひしが、彼等は今信仰と衷心よりの従順を以て之を崇めんとするか。特別に約束の地に入ることを許されしヨシヤアとカレブを除けば、前代より三人の外残りし者なし。之はミリアム、モーセ及びアロンにして、今新に出發せんとするに方り、始めて曠野に入りて感謝と歡喜の歌を謳ひし主唱者ミリアム(出一五・二二)は、恰も彼等に過去の事を想出さしめんとするものゝ如く逝けり。茲に於てモーセとアロンのみ残りたり。此の二人は慘憺たる世路に疲れ果てながら、尙之よりエホバの御業を學ばんとする新らしき順禮等の先達として、新らしき首途に就かんとせるなり。右に由りて此の出發の際に起りしことを理解し得べし。イスラエル人はカデシ寧ろチンの曠野に居たり。カデシは一個所に限らず、其の地方をも總稱することあり。斯る多衆の人々一所に居りしに由り、日ならずして自然水の缺乏より苦みしならん。當時の人々は神の異能を概ね耳にしたりしが、其の刑罰を知りしはエジプトより出し者等が死するを見たることに由れるを忘るべからず。彼等の心も亦剛愎なりしに由り、其の父祖と同じ運命に陥るならんと思ひて殆ど絶望せり。『嚮に我等の兄弟等がエホバの前に死にたる時に、我等も死にたらば善りしものを』(民二〇・三)、即ち神の罰に由りて曠野に彷徨ひし間に死にたらば善りしと云ひし言は、不信に基ける絶望の言表なり。其の眩きは過去の事件と失望とを思出せしに由れり(二〇・五)。即ち民等はエジプトに住居

せしこと及び其處を出づる際希望を起したる事と、殆んど手の届く所に善き地を見ながら再び死する爲に曠野に追返されし絶望とを對照せしが如し。かくて民復びモーセとアロンに背反けり。

モーセとアロンの心中にさへも民と等しき情緒湧來りしが如くなれども、其の理由は異なれり。民は結果を疑ひてモーセとアロンとに反きたり。即ち彼等は二人に導かるゝ間は決して約束の地を有すること能はずと思ひたりしなり。之に對してモーセとアロンも亦成功を斷念し民に背けり。かく最初より不信にして逆ふ民は決して其の地に入るを許さるべからず。此の各自の理由は相異なりしも、民もモーセもアロンも到底地を嗣ぐこと能はずと思へり。既に述べし如く民はモーセとアロンに對して背き、アロンとモーセは又民に背けり。其の實何れも絶望と反逆より生れたるは民の方もモーセの方も同一にして、二者ともに眞に神を信ぜざりしこと是なり。民は彼處に入るに神を嚮導者とせずして、モーセを見たりしが故に絶望し、又モーセは民を見るに、今神に導かれて必ず其の成就し給ふ約束に確に與り得るものと認めず、唯其の弱點のみを見たり。而して此は直にモーセの言行に現れたり。彼は神の命令に従ひて『エホバの前より杖を取り』民の眼の前にて磐の傍に立てり。其の杖はエジプトにて奇跡を行ひ、又レビデムの磐を撃ちて水を湧出でしめしもの(出一七・六)と同一なりしならん。

一般の説によれば、モーセの罪はアロンも半は與りしが、彼が唯磐に命ずれば『磐其の中より水を



出さん』に、却て之を撃ち、而も二度之を撃ちしにありとし、猶又此の際怒りて『汝等背反者等よ聽け、我等水をして此の磐より汝等の爲に出でしめん歎』てふ性急不當なる言を發せし爲なりとす。されど此の説は信じ難しと思ふ。モーセは不信に由りて、磐に命するよりも撃つ方を有効なりと思ひて撃ちしとは信じ難し。然るに若し杖を用ゆべからずとせば『杖を執る』ことを命せられじ。加之レビデムにて斯くすることを神が明かに命じ給ひしは(出一七・六)不思議に堪へず。假に一步を譲るとするもアロンは何故にモーセの罪に與せしや。素より詩一〇六・三二、三三に記載せる如く、モーセが二度磐を撃ちしは民の態度を見て甚だしく怒を含みし爲なるは明白にして、其の言語に現る。聖書に『其の口唇にて妄に物言へり』とあり。又其の言の意味は囁るとの義なり。モーセは磐に命する代に之を撃ちしために聖書中何れの處にも非難さるることなしと雖も、『民メリバ(争論)の水の邊にてエホバの烈怒を引起せしかば、彼等の故に因りてモーセも禍害に遇へる』ことを明記せり。

有名なるラビの註解者ラシの説に由れば、モーセが二度磐を撃ちしは始めに過ちて他の磐を撃ち、唯救済の水出でしのみなりけるが、再び撃ちしに盛んに湧出たるなり。又モーセの罪は磐に命する代りに之を撃ちたるにあり、そは民は左の如く思ひしならん、曰く物いふことも聞くこともせず、又食物を要せざる磐すら神の聲に従はば、況て吾人に於てをやと。又エルサレムの註解者に由れば、始め磐を撃ちし時血出でたりと。  
×原語は妄に云ふこと、囁ること、又誇ることを意味す。

モーセの罪に關する他の點は、其の後エホバ自らモーセとアロンに向つて、『汝等は我を信ぜずしてイスラエルの子孫の目の前に我の聖きを願さざりしに因りて、この會衆をわが之を與へたる地に導き入ることを得じ』(民二〇・一二)と宣告を降したまへる時、明示し給ひたり。斯く民はモーセとアロンに背き、彼等はエホバが彼等に與へし地に導き入れ給ふを信ぜざるに由りしも、モーセとアロンが民に對して怒りしは、二人が神を信ぜずしてイスラエルの子孫の目の前に、其の大能と恩寵を崇めざりしに由る。イスラエル人は神の民として、モーセは其の仲保者として、共に過ちたり。是迄モーセは如何に試みらるゝも任務に就ては忠實を盡し、神に懇願し、又信仰に由りて勝ちしが、今や初めて不信に由りて吾人に於ることく過ちたり。蓋は萬事を可能ならしむる神の恩寵と大能と、約束の確乎たるを願みずして民の罪を見しに由りて、約束を嗣ぐこと能はじと推測せしによる。之に類似せる場合に於るアブラハムと異なりて、『彼は約束を疑へり』。然れば不信に由りて民の仲保者として失敗せしが故に彼は任を解かれ、イスラエル人を約束の地に導くの大任は之を他人に委ねざるを得ざりき。

右の意味にとりてのみモーセの罪は個人的にあらず、公務的なりとの説を承認するを得ん。蓋は責任に就ては個人的と公務的との區別をなすを得ざればなり。寧ろモーセとアロンは老いたる賓旅にして、久しく曠野を流浪ひしにより疲勞し、道路の悪きと石の爲に足を痛めしが、再び旅行の苦



難に遇ひて暫時力衰へ、且疲勞して犯罪の岩に礙きしものとするこそ可なるべし。然りと雖もメリバの水の邊にて『咳きし』此の事件よりも深き哀愁を惹起すべき事件は殆んど他にあるなく、又眞實に之に類似する事件は舊約聖書にあらすして新約聖書にあり。エリヤも之に類似せる場合に於てイスラエル人のために絶望し、又モーセと同じく職を擡るゝ前に、モーセと同じ教訓を學ばんため『神の山』に遣されたり。然れども眞にモーセの誘惑に類似せるものはパブラスマのヨハネの歴史にあり。即ちイエスのメシヤなることに就ては疑はざりしも、其の活動の方法に就て疑ひ、其の見聞せしものによりて當時又その時代中に約束の成就せらるゝことにつき絶望し、彼も亦その任を解かるゝ直前に、其の弟子をイエスの許に遣せり。此處には之を論ずること能はざれども、聖書にパブラスマのヨハネを前表する者はモーセとエリヤにして、主イエスを前表するものはヨシユアとエリヤなるを認むれば足れり。

カデシを出づる前、モーセはエドムの王に使を遣し、又士一・一七に記載せる如くエドムの北方の地を有せしモアブの王にも亦かくなして、イスラエル人をして彼等の國土を通過せしめんことを請へり。地圖を一瞥するに、パレスチナはエリコの附近のヨルダン川の對岸より入るべきものと

モアブの王の回答は聖書に記載せず。それはモアブに行く路はエドムを通過するものなるため、エドムの王にして之を拒絶せば、假令王が之を許すも効なればなり。

せば、この路が最直通路なることは明白なり。確に之は南の地に據りて三十七年前イスラエル人に勝ちし者(民一四・四四、四五)との接觸を避くる路なれば、最も困難少き所なりき。然るにモーセはイスラエル人がエドム人と同種族なることと、以前エジプトにて受けし艱難と、又エホバの使者が不思議に之を救ひて導き出し給ひしことを叙べて懇願せしも、エドム王は之を聽容れざりき。又其の要求を限定し右にも左にも曲らず、井の水を飲むことあらば(二〇・一四—一九)、其の價を償ふことを約し、唯隊商が常に往來する路即ち『王の路』のみを通過せしめんことを願ひしも、エサウの子孫は絶對に之を拒絶せしのみならず、急ぎ國境に斥候軍を集めたり。兎角する中、モーセの使者が其の使命を以て出掛けたる間にイスラエルの陣營は行進して、エドムの『境界の極』と稱する所に到りたり。廣きムレの谷を経てカデシより一日路程東方に方り、突然目に立ちて屹立したる高さ不思議なる狀を呈する城の如き著しき山あり。現今の名稱はモデラにて、聖書に記載せる古のモセラの名稱を保存せり。此は民二〇・二二—二九を申一〇・六と對照するにホル山と同一なるを知る。實は『ホル山』或は現今のホル・ハ・ホル(『山又山』)は『著しき山』との意味なり。此は『王の路』即ち今のグウエイル谷を経てエドムを通過せんとせば、イスラエル人の進むべき當然の道程なりき。此の道程を取れば、彼等はモアブの地を通過して容易に且一直線にヨルダンの彼岸に達するを得べかりしなり。故に此處に止りてエドムの王の回答を待つは當然なりき。モデラはエドムの國境外



にありしが、また東と南及び南西に通ずる谷即ち道の入口にありしを以て、イスラエルの子孫は其處より場合に由りては何れかの路をも選ぶことを得たり。加之モデラの嶺よりは、東の方エドム人により、或は北と西の方アマレク人とカナン人により、彼等に對する敵對行動を監視することを得たり。前述せし所に由り、吾人が此の地を以てアロンの死せしホル山と認むる理由を推知し得べし。

傳説に於るホル山の位置はエドムの首府ベトラに近きエベル・ハルンなり。之を陳ふるはイスラエル人がエドムを通過せんとて許可を願ひ、其の回答を待たずしてエドムの中央に行進し、又三十日間其の首府の附近に營を張りとする憶説を論駁せんが爲なり。且イスラエル人は最も近き谷、即ち北に向つてエドムとモアブを経てヨルダンの渡場に往く路を通過せんと欲せしならば、何が故に遠く南行せしかは理解し難し。爾りしとせばエベル・ハルンは彼等の道筋より遠く外れたり。尙又モデラをホル山とせずんば、聖書に記す如く年代順に従ひて諸事件を一致調和せしむることを得ず。若しイスラエル人の陣營がベトラに近かりしとせば、アラデの王はイスラエル人が強ひて其の領地を通過するを恐るゝ理由なく(民二一・一)、又イスラエルを攻撃せんとてベトラまで南東に進軍せしことなかるべかりしが故なり。然ればエベル・ハルンをホル山とする註解者は、アラデの王の攻撃を其より以前、即ち民二〇・二二に記せる時に起りたりとせざるを得ず。果して然りとせば、イスラエル人が全く反對の方向を進みつゝ、エドムを通過せしめんことを願ひしに、王は如何にして彼等が「開者の道よりして来る」といふを聞きたるかを想像し難し。此の重要な理由に反對する證據は、ハルンの爲にする傳説によるの外なく、却てモデラをホル山と同一なりとせば、此の事件は明白にして理解し易く、又其の物語に就て聖書に記せる年代順は吾人の思ふ所と一致せり。

かく速にアロンの上に神の宣告の執行せられしは、其の罪を犯せし所より一日路を行きし時なり。此の物語は其の事件と場所に適ひて莊嚴を極めたり。全會衆の目前に於てモーセ、アロン、エリアザルの三人はホル山に登り。アロンは祭服を纏ふて自らの埋葬に登り行きたり。彼は之を知れり又その營の凡ての者も知れり。四十年間彼等のために聖事に就て役事を爲せし其の老人の神しき後姿を、營にあるものは尊敬しつゝ無言のまゝ、之を見收めなりと思ひつゝ見送りしが、敢て送別の辭をいふものなかりき。彼の預表的祭司たるや人格に由らず、其の任務の連綿たる繼續によれり。此の故に其の山の絶頂にて先づアロンは祭服を脱せられ、其の子エリアザル之を着せられたり。斯てアロンは死たりしも祭司の職は分秒間も絶えざりき。是に於てアロンは最早祭司たるが、神のイスラエルの一人として「其の民に加りぬ」。然るに山の上にて三人の間に行はれしことに就て神の御手は沈黙の幕を下せり。茲に新任の祭司エリアザルは、口を嚙み恐れおのける會衆の中に役事をなさんとて、ホル山に於る嚴肅なる現場より降りたり。記して曰く「會衆皆アロンの死たるを見て、三十日の間哀哭をなせり。イスラエルの家皆然なせり」と。

民三三章三七以下に由れば、アロンはエジプトを出し後、四十年目の五月朔日に死したるが、行年百二十三歳なりき。

此の時に當りイスラエル人は引續き凶報に接したり。エドムより歸りし使者の報告に由れば、エドムを通過することは絶対に拒絶せられたるのみならず、エドムの大軍はイスラエル人の營に近き



國境に集合したり。若し神の命令に従つてエドムを攻めざることをせば、イスラエル人は速に退却せざるを得ず。ホル山を出發し、『エドムを繞り通り』、即ちエドムの東を通りて北に進む普通の路によれば、イスラエル人はエルゼイブの谷を下りてアラバの北方を通過すべきなれども、此の路は聖書の記事に由れば、エドム軍の集合障地なるエドムの西界に方れる所なり。是故に之を避けんため、先づ退きて再びムレの谷を通り、其處より南東の方向なる現今のアザジメの山、古のテマン侯の領地、即ちパラン山を通過せざる可らず。茲に於て此の迂廻路によりてイスラエル人は、現今のグデハギドの谷とアドベの谷を通過し、エドム人の軍勢の待伏せし所より遙か南方のアラバに到りたり。實際申一〇・七に由れば、ホル山より退きし後の次の二の驛はグデゴダとヨテパテなりしことを知る。然るにイスラエルの軍旅はムレの谷より南に繞らんとせし時、彼等はアラデの王の領地に近く向ひ居たり。勿論王はイスラエル人が既にエドムを通過することを拒絶せられしことを聞き、且彼等が自己の領地の側面に在るを見て、王は自然自分をも攻撃するならんと考へしならん。記して曰く『茲に南の方に住めるカナン人アラデ王といふ者、イスラエルが問者の道』(寧ろ『商人の道』)

アラデは現今のテル・アラデにして、ヘブロン南約二十哩にあり。此の地方に於る當時の地名は今尙存するもの多し。

和文の如く『問者の道』、即ち三十八年以前其の地を窺はんとて十二人が通過せし道にあらず。商人の道と翻譯せば可なるべし。『疑みならしたる道』と譯することもあり。

道』、即ち隊商の往復する道ならん』よりして來ると云ふを聞き、イスラエルを攻撃ちて其の中の數人を擄にせりと。恐らく其の後衛を攻めしならん。この事件は次の二の理由を表さんが爲に記せり。第一、カナン人が正當の理由なくイスラエル人に敵對せしこと、第二、神の眞實なることは是なり。是に於てイスラエル人はカナン人の城邑を悉く滅さんとの『誓願を立て』しが、神は之を聽容れ給ひ、今の願に對し後年神は勝利を與へ給ひたり(士一・一七)。當時既に眞實なるを先見し、預言的に稱せられしホルマ(『殲滅』)或は呪詛の意味なる地名は現實となりたり。

某註解者は、最初よりイスラエル人はカナン人と戦ひて大勝利を得たりと想像すれども、此の想像は聖書の此の物語及び他の記事と兩立せず。



第二十一章

イスラエルの子孫のエドムを『繞り通る』ここ  
 『火の蛇』と『銅の蛇』—イスラエル人がアモ  
 リ人の地に入るここ—アモリ人の王シホンと  
 バシヤンの王オグに戦勝するここ—イスラエ  
 ル人ヨルダンの邊なる『モアブの平野』に營を  
 張るここ

(民二二章三—三五。三三章三五—四九、  
 申二章—三章一—)

エドム王の拒絶と、カナン人アラデの王の理由なき攻撃に由り、イスラエル人は今や其の行進上に最大困難の起りしことを認めたり。彼等がシナイ半島の諸處を流浪ひし三十八年間強大なる隣邦の民は、現今の漂泊するベドキン人の如く彼等を惱せざりしは當然なりき。然るにイスラエル人が再び集合し、軍旅として行進を始めし時、神が彼等の爲になし給ひし驚くべき事の報知が同地方の習慣に従ひて詳細に且誇大に四方に傳はりし爲に恐懼を抱くと共に、抵抗せんとする決心を生ぜしな

らん。而して先づ最初に抵抗せんと思ひしも、その無益なるを認めて恐懼せしならん。而してイスラエルの神は凡て他國の神に勝る者なることを確認するに至れり。東洋の偶像禮拜者が斯く思ひしは當然なり。又之を知るに由りて聖書の物語を解するを得べし。

イスラエル人がエドムを『繞りて』進み行きし一般方向は、先づ紅海のエラン一名アカバの灣頭を指してなりき。其處より數時間エジオンゲベル(巨人の背骨)の北方の山中に入り、尙其の方向に進んで、エドムと東方の大沙漠なる石灰石の高地との間を通ずる道を経てモアブに到りたり(申二・八參照)。此の北進中敵に出會して數次戦ふことあらんと思ひたりしも、其の旅行の前半に於ては他の困難に遭遇したり。そは彼等の行進せしアラバの幽谷は寂寞にして暑氣甚だしく、草木はなく道路は險惡にして砂暴風屢吹來り、モーセが後日民に思出さしめし有名なる『彼の大なる畏ろしき曠野』(申一・一九)なりき。道路險惡のため困難なるに加へて、水少く、マナの外食物なきため、『民心を苦め』、『神とモーセに向ひて喧きたり』。神が彼等を罰せんとて『火の蛇を民の中に遣し』、『多くの人を滅し給ひしは、凡て神の從來の處置に著しく類似せり。神は聖旨を行ふために再び新しきものを造り給はず、唯既に存せし物を其の聖旨のまゝに主權的に利用し給へり。この地方に毒蛇の多きことは、旅人に由りて數次確證し説明せられたり。或人、灣の附近を記して曰く、『濱の沙に蛇の跡處々にあり。其の蛇は諸處より匍ひ來れるが、或跡は蛇の直徑二吋を下らざるを示し、我が案



内者も此の地方には蛇甚だ多しと云へり」と。又イスラエル人の通過せしと同一の路を通りし他の旅行者の曰く、「午後になりて班多き大なる蛇を持来れり、此は輝ける點と螺旋の印あり、又其の齒の形状より見て明かに甚だしき猛毒ある種類に屬せり……」。此等の蛇を甚だしく恐るゝペドキン人の言ふ所によれば、此の地方には斯る蛇夥し」と。銅の蛇は一名「火の蛇」と稱へらるゝ事實より推定すれば、これに咬るゝ苦痛よりも寧ろ其の外観を見て名付けたるものならん。

この事件に於て最も注意すべきこと二あり。一はイスラエル人が迅速に非常の謙遜を現しつゝ改悛したること(民二二・七)と、一は致命的に咬れたる者に生命と健康を回復せしめし象徴の驚くべき教訓是なり。モーセは神の命に従ひ、銅を以て火の蛇を作りて杆の上に載せ置きしが、之を仰ぎ觀し者は何人も直に癒えたり。主イエスの教へ給ふ所により、之は「凡て彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得ん爲」(約三・一四、一五)に、人の子の擧げられし事を直接預表するものなるを知る。斯く其の療法の簡易なること、即ち唯信じて仰ぎ觀るだけにて、即刻完全に蛇の致命的咬傷に對する唯一十全なる療法となる事實は、福音の諸の效力の相對物なり。然れども主イエスの預表と聖言を正しく理解せんため、先づイスラエル人は銅の蛇を擧ぐる事を如何なる風に見また考へ、又之より出づる癒す効力を如何様に思ひしやを研究せざる可らず。イスラエル人は火の蛇の爲に死すること、を以て、直に蛇に由りて樂園に死の入りしことに關聯するものとせしや疑なし(ユダヤ人の註解には

爾く言及する者あり)。今や彼の火の蛇に象りて造れるも、其の毒ある咬傷を與へざる銅の蛇は擧げられたり。これイスラエル人を癒さんが爲なり。然れば火の蛇の猛毒は、擧げられたる銅の蛇に因りて除かれたるは明白なり。之に因りて人間が始めて蛇のため害毒を蒙りし時、婦人の裔が蛇の頭を碎き、又それがために己の踵を碎かるべしとの約束を與へられしことを思出さしむ。聖書外典のソロモンの訓言(一六・六)に右の意味に取りて銅の蛇を「救の象徴」と稱し、又聖書にも「神は己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまへり」(羅八・三)、又「神は罪を知り給はざりし者を我等の代に罪となし給へり」(哥後五・二一)、又「キリスト木の上に懸りて、自ら我等の罪を己が身に負ひ給へり」(彼前二・二四)と明かに教へられたり。此の「救の象徴」の三大特點よりルーターは預表の貴重なる意味を斯く推論したり。曰く「第一、モーセが神の命に従ひて作りし蛇は、銅(赤)を以てせり。此は赤く又咬まるゝ時は火傷の如くなる火の蛇に似たれども毒なし。第二、銅の蛇は標のために杆の上に載せ置かれたり(西二・一四、一五參照)。第三、火の蛇に咬れて癒されんことを欲せば、杆の上に載せたる銅の蛇を仰ぎ觀するべからず(見て信すべし)。然らずんば癒ゆることも生きたることも得じ」と。近代獨逸の批評家は約三・一四を註釋して曰く、「キリストは有毒中の有毒なる能力を有する罪を自身に引受け、吾人に代りて負ひ給ひたるが故に、此の蛇によつて前表せられたる者の實體なり」と。



イスラエルの子孫が日々旅行するに従ひて、漸次其の目的なる約束の地に近づく行進を研究するは、興味最も深し。この地は彼等にとりては吾人に於る如く舊跡と記念の地にあらず、美しくして希望に満る所なりき。生來唯曠野の外更に見る所も知る所もなき民に取りては、當時の肥沃豊饒にして且勝景に富みしパレスチナは、吾人が到底想像し能はざる程の魅力を有したるならん。然らば此の行進の一步一步は謂はゞ直接神に導かれしものにして、又或意味に於ては奇跡とも謂ふべく、而して此は後に起り來るべき事の保證たりき。近世旅行者の探究は益々精細を盡し、吾人をしてイスラエル人の行進に就て恰んと之と行を共にすることを得せしむ。上述の如く、同地方に於て古の地名を驚くべく保存することは、聖書に記せる場所の現場を見出すに便宜を與ふると共に、その地の悉しき記述は聖書の物語に最も強き光を投げ、其の確實なることを證明す。

イスラエル人の尙通過せんとする路は、現今ダマスコよりメツカに到る大隊商が通ずる路と幾分同一なるを讀者は忘るべからず。其の通過し或は入込みし地方は左の如し。第一、イスラエル人はエドムを左に見て其の東界に沿ふて往けり。彼等がカデシを出でし時(民二〇・一八)、通過せんことを求めしエドムの西界は、山多くして峠道少きに由り、イスラエル人に對して容易に防禦し得る所なりき。されどイスラエル人は、エドムと戦ふ可らざることを神より命ぜられし(申二・四一六)にあらざれば、彼等の爲に開放されし東部國境は或は局面多少の變化を生ぜしならん。然れども此

の事は、エドム人が西方に於ては軍を率ゐて戦はんとせしかども、東界に於ては親密なる態度を取るを得策とせしことを説明して餘りあり(申二・二九)。イスラエル人は「エ・アパロム」(「跡」、或は「道路多き山」、或は「横の山」の意)に到着し、モアブの東方にある曠野に近づかんとせり。此處の流即ちゼレデの谷(民二一・二)はエドムとモアブの境界に當れり。然るにイスラエル人はモアブに對しても亦戦ふことを禁ぜられしが故に(申二・九)、彼等は其の領地にも手を出さず、引續き北方に直進し、モアブの曠野を経て、遂にモアブ人の領地と、アモリ人の領地との境界なるアルノン川、即ち現今のモジブの谷に到着せり。アモリ人の領地はアルノン川よりヤボクの波に達せり。アルノンは元來モアブの領地なりしが(民二一・二六)、モアブ人はアモリ人に逐はれて南に退きたるなり。イスラエル人はアモリ人と戦ふべからずとの神の命令なかりしが、アモリ人の王シホンは彼等が其の領地を通過するを拒みしかば、イスラエル人は神の命令に従ひシホンを攻め、之を亡して其の地を占領したり。

アパロム即ち「道路」は、モアブの界にある山の總稱なりとする理由あり。

モアブの南界にあるゼレデの流に到りてイスラエル人は既に死海と一直線の處に出で、それより此處を去りて勿論遙に左方に沿ふて進みたり。モアブとアモリ人との境界をなすアルノン川も、亦死海に注ぐ。恰んど其の對岸にハザンタマル一名エンゲデあり。この地方は現今エルベルカと



稱す。舊約時代にはギレアドの地として知られ、新約時代にはペレアと稱せられたり。最後にヤボクの流の北、ヨルダンの東方は舊約のバシヤン即ち現今のハウランなり。アルノンの北方の地は、アモリ人が之を領有せざりし以前久しくモアブの領地なりし事實は、ヨルダンの西方を「モアブの平野」(民二二・二)、否寧ろ「モアブの低地」と稱せし如く、ギレアドの高地を指して「モアブの野」(二二・二〇)と稱せし理由を説明す。イスラエルの子孫がシホン王に使を遣し、其の國を通過せしめんことを求めし時、彼等は猶アルノン川の南方に營を張れり。此の川の流を探險したる人の眞に迫れる描寫によれば、其の幅は岸頭より岸頭までの距離は約三哩にて、其の深さは南岸の頂上よりは二百五十呎にして、北岸の頂上よりは千九百五十呎なり。勿論、イスラエル人は此處を渡ること能はざりしも、更に東方の上流なる曠野に流るる(二二・二三)所を渡るを得たり。彼等は使者のシホン王より歸るまで多分待ちしならん。王が其の軍勢を率ゐりて彼等を邀撃たんとすと聞きし時、彼等の勇氣と神に對する信頼の如何に絶頂に達したりしかば、民數紀略の特質を形付くる歌に由りて明白なり。其の歌は露營火の側にて歌ひし軍歌と思はる。アルノン川の岸よりイスラエル人は

\* かの『歌』の中、民二二・二に記載せる所は少くも三あり。然るに此處には此の最も興味ある歌に就て研究することを得ず。尙地理學的の詳細に入り、或は民二二・二に記載せる諸語を、民二三・三と申二二・二に記載せるものと對照すること能はざれども、兩者は全く一致調和せるものなり。

モテ一名バモテ・パアル、即ち「パアルの崇邱」に達するまで疑もなく北方に向つて行進せり(二二・一九)。此處は後にバラクとバラムの登りしところなり(二二・四一)。「バモテよりモアブの野にある(モアブの高原に在る)谷に行き、曠野に對するビスカの巔に到れり」(二二・二〇)。此の曠野は死海の北東の岸に浴びたる地方なり。

ビスカとネボとを頂けるアバリム山中の此の高地より、イスラエル人は始めて約束の地、殊に彼の神秘なる鹽の海を眺めたり。その海面の閃くことと、其の周圍に生物殆んどなきこととは、死を思はしめ、嚴肅なる記念と警告を與ふるものなりき。遂に彼等は其の目的地を眺望するを得たり。シホンとイスラエル人の決戦は殆んど死海の見ゆる所にて演ぜられたり。「刃をもて」シホンと其の軍勢を鏖殺にしたるヤハツに於る勝利に由りて、イスラエル人は「シホンと諸の城邑を包括するアルノン川よりヤボクの上流(現今のナル・アンマン)の流に到るまでの全地を占領せり。ヤボクの上流はアモリ人とアンモン人の境界をなせり。「アンモンの子孫の境界の堅固なりし」に由りて、アモリ人は之より侵入せざりき(二二・二四)。イスラエル人も亦侵入せざりしはアモリ人と同一の理由の爲にあらざりて、神の特別なる命令に由れり(申二・一九)。然ればアンモン人の國には手を觸れずして北進し、バシヤンの王オダに勝ち、其の領地とギレアドの山地を占領せり。是に於てヨルダン

\* 此の地方及び其の諸の城邑の趾は近世の研究によりて探検調査せられたり。



川の東方の全地は既にイスラエル人の領有に歸したれば、其の川を渡るに何等の反抗を受くることなかりき。

然りと雖も久しく約束されたる産業に實際入るに先ち、イスラエル人は實に學ぶべき大教訓ありき。今や永遠に神の國と此の世の國との關係を現す事件行はれんとす、即ちエホバの僕モーセの任務また終り、パレステナを占領し、之を保有するに就て後事を謀らざるべからず。然るに是等のことは實はイスラエルの歴史の次の時代に屬するものなり。境界線なる此の川を渡るべき合圖を待ちつゝ、「エリコに對するヨルダンの邊」なるシツテムに營を張りし時、イスラエルの子孫の曠野に彷徨ふ事は茲に終局を告げたり。

舊約釋義 卷二終

明治三十七年十二月十六日印刷  
明治三十七年十二月二十日發行  
明治三十七年七月三十日再版發行  
昭和四年十月十九日改訂發行

定價二圓五十錢  
送料十四錢

著作  
所  
有

翻譯者 ジエームス・ハインド  
發行者 東京市赤坂區氷川町五番地  
          ジョージ・バーナム・プレスウエート  
印刷者 東京市王子區堀船町一丁目八三五番地  
          折坂友之  
印刷所 東京市王子區堀船町一丁目八三五番地  
          星光印刷社

發行所 東京市京橋區銀座四丁目四番地  
          基督教書類會社  
          電話京橋四五七三番  
          振替東京二二七三番



ジョン・パンヤン 著  
青 芳 勝 久 譯

巡 禮 の 旅

四六判 約七百頁 函入美本 定價三圓  
彩色舶來插畫 八枚 送料 十 六 錢

著者は靈魂の中に起る神の救の戦を何人よりも深く経験した人である。此書は實に彼自身の信仰上の血戦記である。神以外の何ものによつても慰められず、救はれなかつた一職工の懺悔録であり、感謝の記念である。彼は人間の醜惡さを悉く暴露し、天なくキリストなくしては人生に何等の光明のないことを生き／＼した筆を以て叙して居る。聖書以外に眞に人類の書と稱するは此書の外にはない。印度のガンヂーも獄中に愛讀し、生涯の指針を此書から受けて居る。凡そ日光の照す處に此書の影を見ないことはなく、神の恩恵の及ぶ處に此書の歡迎されぬ處はない。本書は在來の『天路歷程』なる漢譯の書名を更に何人にも了解し易く『巡禮の旅』と改題したのである。

ジョン・パンヤン 著  
青 芳 勝 久 譯

溢 る 、 恩 恵

四六判 三百余頁 上製函入 定價二圓  
挿畫 十 五 枚 送料 十 二 錢

この書は一平民と慈憐の神との活きたる交渉の記録である。彼の方では神を忘れ、疑ひ、忌み、懼かつてゐたが、神の方では彼を忍び、導き、諭し、救はんがために行届いた恩恵を授け給ふた。その恩恵に目醒めた彼は『私の心で想像も出来な程に神は慈憐に富んでゐたまふ、私が神の御憤りを豫期しながら御顔を仰ぐと、彼は私に赦罪の微笑を賜はつた』と告白してゐる。神は悪魔の誘惑よりも、又彼の罪よりも遙かに大なるものであつた。清教徒文獻は此の書を随一とする。神のみを標準として生きようとする純一な魂の姿は茲に偽らずに描かれてゐる。有らゆる時代も、有らゆる個人も、生活革命は茲から始まる。譯者は十分なる良心的努力と歴史的考證とを以て此の譯を完了した。

◀送呈第次越申御録目▶

廣 田 花 崖 編

コ ン コ ル ダ ン ス (聖句) 便覽

菊半截 四八六頁 定價二圓  
函入 總クローズ 送料 十 錢

コンコルダンスは、聖書を愛讀し研究する者には缺くべからざる書である。例令ば『御靈を熄すな』と云ふ聖句が聖書のどこにあるかを知るには、『み』といふ所を開いて、『みたま』といふ語を探つて行けば其がテサロニケ前書五章十九節にある事が直ぐ分る。若もコンコルダンスがなかつたら、此一句を見出す爲にでもどの位の時間と努力を費すことであらう、本書があれば囊中の物を取出す如く一分間もかゝらないで、直ぐ見出せるゆゑ、此れ位重寶便利なものはない。聖書と『コンコルダンス』と『聖句便覽』とは信者として、是非持つてゐねばならない書である。ムーデー師は其著『聖書研究の快樂』(本社發行書)中に『コンコルダンス』と『聖句便覽』とが信者に取つてなくてはならぬ書であることを力説して居る。この兩書を持たぬ者は、杖なき座頭の如き者である。

基督教書類會社譯

聖 句 便 覽

菊半截 三三二頁 定價一圓五十錢  
函入 總クローズ 送料 十 錢

本書は愛、禮ひ、惡魔より王、夫に至る三百餘項を五十音順に編纂し、其定義や預言や説明や引例などを豊富に列挙し、一々其句の聖書出典を明かにし、聖書を研究する者の便に供したるものにして、聖書研究上必携の書として『コンコルダンス』と共に本書を推薦する。教授者は勿論平信徒に取つて無二の良友たること間違なし。

ロバート・リリー 著  
三 谷 種 吉 譯

輪 廓 的 聖 書

四六倍判 一三八頁 定價一圓  
送料 十 二 錢

本書は分解、譯語又は譯句、使命、典據等によつて一見して聖書各卷内容の要領を會得せしむるやう之を二頁宛に收め、加ふるに有らゆる方面より集められたる聖書研究の助となるべき各種の資料を巧みに排列したれば、一目の下に其の粗立や特色の分る一種獨特の鳥瞰的好參考書にして、教授者及び聖書研究者にとりて極めて便利にして有益の書である。

◀送呈第次越申御録目▶



新約の聖潔

トマス・タツク著 四六判 二九三頁  
 大江邦治譯 定價 一圓二十錢  
 送料 十 錢

基督再臨の考察

S・D・ゴールドン著 四六判 二八八頁  
 廣田花崖譯 定價 一 圓  
 送料 十 錢

個人傳道の呼吸

トーレー博士著 四六判 一八三頁  
 金田數男譯 定價 六 十 錢  
 送料 六 錢

キリスト傳

ストーカー博士著 四六判 一七八頁  
 リンパ製九 十 錢  
 送料 六 錢

パウロ傳  
 ストーカー博士著 四六判 一七六頁  
 リンパ製九 十 錢  
 送料 六 錢

◀送呈第次越申御録目▶

聖書研究の快樂

ムーデー著 四六版 二六二頁  
 三浦徹譯 定價 一 圓  
 送料 十 錢

比喩釋義

大監督トレンチ著 菊判 四一九頁  
 ゼー・ハインド共譯 函入上製 定價 三 圓  
 送料 十 八 錢

舊約小預言書靈解

堀内文一共著 四六判 四六〇頁  
 大屋左一 上製定價 二圓五十錢  
 送料 十 二 錢

六十六卷之基督

ホセアよりマラキまでの各預言書を精論、釋義、總説、補註を以て丁寧に説明してある。バックストン師は  
 基督教の中心は基督であり、舊新約聖書の中樞は基督である。本書は舊新約聖書の各巻を驚く許りに開  
 示して、基督を現したもので、既に數ヶ國語に翻譯せられてゐる。

日々の光  
 基督教書類會社編  
 ポケット型 七〇〇余頁  
 総皮製 二圓  
 総布製 一圓廿五錢  
 送料 各 八 錢

◀送呈第次越申御録目▶

舊新約聖書の名句を採萃し、毎日朝夕一頁づゝ讀誦する便宜のため毎頁に日附を記入し、抜萃句を三百  
 六十五日に配當し、附録として誕生、結婚、病氣、永眠の際に讀むべき句を加へた坐右必備の書。



**基督の模倣**

トマス・ア・ケンピス著 四六判 二六三頁  
 日高善一譯 定價上製 二圓  
 送料 十二錢

**基督の如く**

アンドルー・マレー著 四六判 二八二頁  
 廣田花崖譯 定價 一圓八十錢  
 送料 十二錢

**基督と偕に**

アンドルー・マレー著 四六判 三〇四頁  
 三谷種吉譯 定價 一圓八十錢  
 送料 十二錢

**世界を動かす力**

アンドルー・マレー著 四六判 一七九頁  
 金井爲一郎譯 定價 一圓  
 送料 十錢

**能力に充つる生活**

エス・デー・ゴルドン著 四六判 三〇三頁  
 日高善一譯 上製定價 二圓  
 送料 十二錢

◀ 送呈第次越申御録目 ▶



319  
92



終